

# 渋沢栄一と深川 ②

## 栄一、深川に住む

明治9年(1876)、栄一は深川<sup>ふくずみちやう</sup>福住町にあった米問屋・近江屋喜左衛門<sup>おうみやきざえもん</sup>の屋敷地(現・永代2-37)<sup>えいたい</sup>を購入し、そこへ転居しました。栄一の購入した屋敷地は、大島川<sup>おおしまがわ</sup>に面した立地で、敷地内には多数の蔵がありました。

深川は江戸時代の開発によって生まれた土地です。そこには多くの水路や堀割が設けられたため物資の運搬や荷揚げに便利で、武家の蔵屋敷のほか、商人の蔵や木場・干鰯場<sup>きば ぼしかば</sup>などが設けられ、物流や物資の集積地として栄えていました。また、深川は商業の中心地である日本橋に近いので、栄一にとっては便利な場所でした。

栄一は近代産業を盛んにするための重要な業種のひとつとして、銀行が貸付の際に担保としてとった品物の保管業務を行うために、信頼の置ける倉庫業の必要性を感じていました。明治15年(1882)、栄一らの出願によって深川に設立された倉庫会社は4年余りで解散しましたが、同30年(1897)に深川福住町の住宅内に設立された澁澤倉庫部は事業に成功しました(現・澁澤倉庫株式会社)。



『新撰東京名所図会』(個人蔵)

## 栄一と深川との関係

明治21年(1888)、栄一は日本橋区<sup>かぶとちやう</sup>兜町へ転居しますが、深川との縁が切れたわけではありません。翌年には深川区<sup>あすかやま</sup>区議員に当選し、区会議長に就任しました。同37年(1904)に区議員および議長を辞任した際には、区会から感謝状を贈られています。また、深川区教育会会長への就任など、深川区の教育にも関与していました。

栄一は外国の要人を接待する場所として飛鳥山邸<sup>あすかやま</sup>(現・北区西ヶ原2)をよく使いましたが、深川に招いたこともあり、時には洲崎養魚場<sup>すさき</sup>で魚釣をすることもありました。水郷の趣をもつ深川は、江戸時代には豪商の別荘や大名の庭園が設けられていた場所で、栄一も相手に応じて接待の場所を変えていたのかもしれませんが。

靈巖寺<sup>れいがんじ</sup>(白河1-3-32)に墓がある松平定信<sup>まつだいらさだのぶ</sup>ともゆかりがあります。松平定信(号・楽翁<sup>らくおう</sup>)は江戸時代に寛政の改革を主導した老中<sup>ろうじゆう</sup>です。寛政3年(1791)、定信によって導入された七分積金<sup>しちぶつみきん</sup>の制度によって蓄えられた資金が、明治時代に東京養育院の資金源となったため、定信に対して大変恩義を感じていました。東京養育院は、東京市内の生活困窮者などを保護する目的で明治5年(1872)に創設された公的施設で、栄一は同9年から事務長、同12年から亡くなるまで院長を務めました。また、政治に取り組む姿勢なども含め、栄一は定信を大変尊敬しており、その遺徳の顕彰に努めました。大正14年(1925)から定信の伝記編纂に取り組みましたが、栄一の存命中には完成せず、昭和12年(1937)に未定稿として『楽翁公伝』が刊行されました。

兜町へ転居した後も、深川福住町の住宅に栄一の表札は出していたと孫の敬三<sup>けいぞう</sup>は『澁澤倉庫六十年史』に記しています。栄一は晩年まで本籍地を深川区福住町としており、深川に対して特別な思いがあったのかもしれませんが。

深川区区議長 渋沢栄一  
【『深川区史』上巻より】

『新撰東京名所図会』(個人蔵)